

## 《研究ノート》

### P・A・ソローキンの社会文化

#### システム論

——『社会的・文化的動学』の統合主義的世界観——

吉野 浩 司

#### はじめに

一九三〇年代のアメリカでさかんに行なわれるようになった文化研究、わけても文化人類学と文化社会学は、個別的な特殊研究の枠にとどまらない、可能なかぎり広やかな対象を求める学問態度のあらわれであった。そして文化をひとまとめにする何らかの統合原理があるのではないか、という想定にもとづいてそれは行なわれていた(吉野 二〇〇一)。

そうした学問的潮流のなかで、文化を最も雄大かつ徹底的に探求したひとりに、ピティリム・アレクサンドロビッチ・ソローキン(Pitirim Alexandrovich Sorokin, 1889-1968)がいる。厳密な方法論と、膨大な統計資料に支えられた『社会的・文化的動学』(Sorokin 1937-1941, 以下『動学』と略記)は全四巻通覧一

千ページをゆうに越える、同時代でもまれにみる成果であった(Johnston 1995: 114-128)。質量ともに圧倒されるその偉観によつても、ヴァーノン(Gianbattista Vico, 1668-1744)、マンブラー(Oswald Spengler, 1880-1936)、ヴィノート(Vilfredo Pareto, 1848-1923)、トインビー(Arnold Joseph Toynbee, 1889-1975)らの歴史循環の理論を、数量的に実証してみようというソローキンの壮図はうかがえよう(Sorokin 1927, 1928: 728-741)。

その方法的基礎にすえられたのが「統合主義(Integralism)」である。ソローキンの著作はすべて統合主義の視角から書かれており、そうした理解をぬきにソローキンを語ることはできない、ということにはフォード(Joseph Brandon Ford)がつとに論じていたことである(Ford 1963, 1966)。

身体感覚ないし五感をたよりに研究対象を取りあげる調査、そしてそこの発見の理性による体系化、これらは客観性を重んじる科学が任務としてきたことである。フォードが明らかにしたように、ソローキンはその科学にまっこうから対立するということよりは、その客観性を支えている土台ともいうべき意識に着眼した。その意識に映じた客体の社会学とでもいうべきものをソローキンは構想したのである。ソローキンは確かに「直観」や「メタ」という語彙を多用することで、人の意識に立ち現れてくる世界像をなんとか表現しようと試みている。しかしそれはあくまでも科学

的発見の「源泉」を探求する姿勢であって、ソローキンが対象や真理の神秘に魅せられてしまったことを意味しているわけではない(Ford 1963: 50-51)。こうしたフォードの解釈を受け継ぎつつ、本稿では『動学』に息づくソローキンの「統合主義」の意味を探知することにとつとめたい。

本稿は、以上のような構想のもとで書かれた『動学』のほんの一部分をソローキンの意図にそくして祖述することに徹した。しかし、たとえば第二章第二節で論じる四つ分類を、意識の構造論として読み替えたように、本稿独自の解釈を提示していることも注意しておきたい。ソローキンの統合主義の観点に立つとするならば、その分類方法は、意識の構造論として読んだほうが、より適切だからである。

### 第一章 『社会的・文化的動学』の目的

それではさっそく、ソローキンが社会文化システム論を統合主義として構想した、『動学』の解釈に取り掛かってみよう。冒頭は次の言葉でかざられている。

すべての文化はまると統合しているのだろうか、そしてここでは根本的な部分が付随的ではなく、各々が残りのものと有機的に関連しているのだろうか。あるいは、たんにそれは一緒に放置されているという事実以外にはなにもない、偶然一緒に

漂っているか、空間的隣接のみで統一している文化の客体、価値、そして特徴のただの空間的集積かどうか。最初の文章にしたがえば、それでは何が統合原理(principle of integration)、すなわち本質的特徴のすべてが集中する枢軸なのか、なぜそうした特徴があるのか、その特徴とは何か、今あるような特徴が生きているのはなぜなのだろうか。二つめの文章ならば、なぜ文化の客体と価値の寄せ集め(conglomeration)の一種が所定の領域では起きるのに、別の領域では違った種類が現れるのか。どのように、またなぜ時間の経過につれてある寄せ集めは一定方向に動くのに、他のものは全く別の方向へ変化するのだろうか。(Vol.1: 3)

この一節には『動学』の課題、そして「統合主義」の主題がますますとろなく呈示されているといえよう。整理するならば、この大冊が取り扱った問題は次の二点であった。ひとつは文化の全体をとりまとめる統合原理は存在するのかしないのかを問うこと、もうひとつは統合原理があるならその特徴を、またない場合なら文化の変化の行方を究明することである。こうした問題関心のもとに、ソローキンは自らの「統合主義」の理論、ないしは統合原理をたずさえて「曖昧な問題(dark problem)」の解決に乗り出したのである。

そもそも、統合主義や統合原理とはどうやって着想されたので

あろうか。それについては、統合主義の姿勢とは決して相容れることのない当時の研究状況をソローキンが批評している部分にヒントがありそうである。「調査者のほとんどが、部分や有機的特徴の統合や統一、あるいは相互依存に、どのような意味があるのか」ということを的確に言い当ててはいない」(Vol. 7)と彼は嘆じている。つまりソローキンにとって、文化研究において肝心なことは、「統合の観点から様々な文化的特徴、特質、ならびに複合体の間にある関係の主な形式とは何なのかを説明し、その上で文化統合のそれぞれ主だった意味が何であるかを説明」(ibid.) することだったのである。ソローキンが『動学』の劈頭で高らかに宣言しているのはそのことであつた。

ただし冒頭の下りからも察しかつくように、論理の厳密さを重んじるソローキンの論述はいかにも重厚に感じられよう。とりわけ文化論理の構築を企てた「序論」は、いささか晦渋である。そのためか、従来のソローキン研究では方法を検討した試みがきわめて少ない。しかしフォードも指摘しているように、その難解さの一端は、「統合主義」哲学の重要性を解釈者が理解できていないことにもよる。そこで以下では『動学』の真髄を見極めるべく、その方法論的基礎にあたる第一巻第一部を「統合主義」の観点から幾分立ち入って解説していくことにしたい。ちなみに『動学』第一章と第二章は、『農村社会学』誌上に掲載された論文(1936年 1936b) に加筆が施されたものである。この二篇においてソ

ローキンは、自らの「統合主義」哲学を全面的に表白しているといえよう。

## 第二章 『社会的・文化的動学』の基礎理論

### 第一節 第一巻第一部の構成

さて本稿では、「統合主義」という用語をこれまで不用意に用いてきたが、その内容はいたつて単純明快である。「Xとは何か」と問うた時点で、すでにXの存在を感じているという議論がある。これによると、われわれがある対象を認識するさいには、認識に先行して「なにか」をすでに感得していることになる。ソローキンの「統合主義」哲学は、まさしくこの「なにか」についての存在論であるということができよう。

社会学においては普通そうした社会文化現象の背後にある「なにか」に関する議論は回避してしまいがちである。しかしソローキンはなにゆえに社会問題なり社会現象なりの解明に直接取りこんでいくことをせず、この問題拘泥したのだろうか。その理由は、様々な論理の中にふくまれている善悪や進歩といった倫理的説明によらない厳密な思考を模索する中で、事象の分析に先立つ「なにか」の存在の重要性に気づいていたからにはかならないであろう。

こうしたソローキンの問題認識において終始着目されているのは、文化の「本質的要素」とよばれるものである。これは雑多な

文化全体から、性質に関係のない部分を除外し去った残り、すなわち存在の根源ないし元型である。結論を先取りしていえば、文化の本質的要素には、それぞれ対極をなす「観念」と「感覚」という要素があり、さらにその中間に「理想」というもうひとつの要素がある。しかも、それぞれは個別に存在しているのではなく、同一根源の三側面であると捉えられている。認識に先行する「なものか」とさきに表現していたものが、この「観念」「感覚」「理想」という本質的要素である。否定的にはあるが、かつてマーティンはこれを流出論(emanationism)と評した(Merton 1949: 邦訳四三五頁: Merton and Barber 1963)。新プラトン主義のアイデアのように、ソローキンは万物がこの本質的要素から流れ出してできあがっているものと仮定していたのであろう。種々雑多なすべての実在物の中から、このような本質的要素を浮かひ上がらせようとするのが、『勤学』の第一巻第一章の内容である。さらに第二章での主たる課題は、この存在への問いと表裏一体をなす認識方法の整備である。ここでは自然科学およびそれに依拠する社会科学と、統合主義的認識論に根ざすソローキン自身の社会学とが比較対照されている。それでは文化の本質的要素についての議論のほうから順に紹介していくことにしたい。

## 第二節 文化統合の諸形態

ソローキンは社会文化的事実の位相を、次の4つの段階ない

しは性質に分別することから論を起している。すなわち空間的あるいは機械的隣接、外部要因による連関、因果的あるいは機能的統合、ならびに内的あるいは論理—意味的統一。

### 一 空間的あるいは機械的隣接

われわれが社会文化全体を見渡して、まず最初に五感を通じて感覚的に知覚するのが、「空間的あるいは機械的隣接」である。便宜上われわれの意識のように、文化にも表層から深層への階層があるとすれば、最表層にくるのが、この「空間的あるいは機械的隣接」である。これは本質的要素である中心部から離れた末端に位置しているという理由で、個々の要素同士の結合が極端に弱いという性質をもっている。したがって人間が感覚的に知覚しやすい要素には、相互の統合が発見しにくいという逆説が成り立つ。この「空間的あるいは機械的隣接」をソローキンは集積の同義語とみなし、「合一の唯一の紐帯としての空間的、機械的な同時発生(concurrence)をみせる社会的、物理的空間の所定の領域における、文化的要素(客体、特徴、価値、観念)の何らかの寄せ集め」であると説明している(Vol.10)。もちろんソローキンは、研究対象としての「空間的あるいは機械的隣接」を重視していない。彼はこれを、様々なものが放置された「ゴミ捨て場」、あるいは「屋根裏部屋」といったものに喩えて、個々の物体の相互連関の乏しさを比喩的に表現している。

さらにいえば、かつて人類学者によって用いられていた「文化

領域」や「文化複合体」などの概念が、この空間的隣接に相当する。ソローキンは、これら統合の程度が弱い、したがって本質的要素が見出せない概念を持ってきたところで、領域内の要素や複合体、あるいは特徴の間にある関係などは、見つからないし、仮にあったとしても取るに足らないものであると見なしている。それほどばかりか、この「統合形式の予備的分析の欠如」からくる錯誤によって、「空間的、機械的な分布」、集中の度合い、あるいは「要素の出現の頻度」の調査にばかり没頭し、いたずらに相互関係の希薄な要素を結びつけることに目を奪われ、肝心の「機能的、論理的な紐帯を注意深く分析しようとはしない」人類学者の怠惰を、ソローキンは手厳しく批判している (Vol. II)。簡単に目につきやすい事物には、その間の統合や相互関係が見つけにくい、という先ほどの逆説から生じる弊害がこれである。文化人類学において「空間的あるいは機械的隣接」を議論したウィッスラー (Clark Wissler, 1870-1947) は、アメリカ文化の特質を機械的の発明、大衆教育、および選挙権に求めたほか、ナショナリズム、聖書崇拜、安息日、法典、軍国主義、ならびに商業主義にみとって分析を進めていった。ところがソローキンは、上記の要素がすべて「独特で」、「典型的で」、しかも統一の代表であるとするなら、ゴミ捨て場でさえ独特の空間的な統一体をなしているのではないかと、ウィッスラーに皮肉を述べている (Vol. II-12)。

ソローキンは文化研究に求めていたものは、こういった個々の

知識の断片の集積ではなく、諸要素が機能的または内部において統一された複合体であり、そこでは他の特徴なくしては列挙した特徴が見出せないまでに統合している本質的要素にはかならなかったのである (吉野 二〇〇一: 八四―一五頁)。

## 二 外部要因による連関

つづく「外部要因による連関」は、層としては空間的隣接と同じく表層に位置してはいるが、若干ながら個々の事物が同居する必然性を感知することができるといえる。いわばこの「外部要因による連関」とは、機能的あるいは論理的な結合こそはないが、「外的な共通因子」によりひとくくりにすることができる集合のことである。「社会地理学者は地理的状態の観点から、所定の領域の多くの文化的特徴の統一性を観察」してきたわけだが、その統一性が「外部要因による連関」に該当する (Vol. II: 13)。

「外部要因による統一」の例を、ソローキンは雪国の生活に求めて考察を進めている。雪国では、寒い自然環境という外部要因が働いていることによって、暖をとる設備、飲食物、あるいは衣服の種類や性質に、ある程度の必然性を見出すことができる。したがって、これらの事物に統一性を認めることができよう。他方、「外部要因による統一」は、あくまでも「ある程度の必然性」にすぎない。たとえばある国で愛飲されている体を温めるウォッカは、もしラム酒をもって代用されたところで、なんら支障をきたすことはない。つまり特定の事物と別の事物との代替が、全く

もって可能なのである (Vol.1: 13-14)。これは統合の程度が、それほど強くないことを示唆している。

### 三 因果的あるいは機能的統合

上述のふたつの結合を感得するよりも、もう少し慎重に考察することによって発見できる連関に、「因果的あるいは機能的統合」がある。あらゆる科学が経験的因果的方法によって追求し続けてきた統合であるので、これは周知の様式であろう。ソローキンによれば、「因果的あるいは機能的統合」とは、ひとつの因果的(機能的)統一体をなす文化要素の組み合わせのことを意味している。たとえばおもちゃの部品がまとめて箱の中に入ったままだと、ただの空間的隣接に過ぎない。しかしひとつたび組み立てられただけなら、すぐにでもその各部品は、構造的、機能的な統一体を形成するようになる。こうした相互に依存しあう各部分の全体は、ねじひとつ緩めただけで、まったく作動しなくなることも十分にありうるのである。

これと同じように、「どんな文化領域にも、それを成り立たせる特徴、型、客体、そして価値の全体性、つまり機能的統合を表した複合体がつねに存在している。重要な構成要素ひとつの深刻な変化、または消滅が、複合体の残りを修正しようとする。さらにまた構成要素は、移植された複合体が生き残らないか、非常に変化させられるか、あるいは破壊するという、いずれかの形で種々の形態に姿を変える」(Vol.1: 17)のである。このように文

化研究においては、「因果的あるいは機能的統合」が重要な位置を占めている、ということがであろう。

もちろん「因果的あるいは機能的統合」に難点がないというわけではない。現代の社会科学者の多くは、研究対象の中から任意の変数を取り出して、その「因果的あるいは機能的統合」を検出していくことで、社会文化現象の特質を説明していこうとする。いいかえれば「ふたつ以上の文化的変数間にある因果―機能的な関係、斉一性、法則を獲得しようとする躍起になっている」(Vol.1: 18)。確かにこの方法は、社会文化現象の諸要素が隅々にいたるまで因果―機能的統一体を形成している時には格別に効果的である。しかし残念ながらあらゆる文化現象が、そのような統一体で満たされているというわけではない。「どんな文化にも、狭義の因果的連関が見出すことのできない空間的、外的な統一体が存在」しているからである。したがって、「多くの因果論者のように、文化的客体の寄せ集めがすべて機能的統一体であるとか、すべての構成要素の間には機能的な結合があるに違いないなどと仮定することは的外れである」ということができるであろう (Ibid.)。

### 四 内的あるいは論理―意味的統一体

こうした程度のことなる様々な文化的要素の繋がりを特徴づけたあとで、ソローキンが最終的に「窮極の形態をとった統合」、もしくは「窮極的に統合した結果を表した重要な統一体」である

と断定しているのが、「内的あるいは論理—意味的統一」である (Vol. I: 19)。ここである「窮極的に統合した」とは、「各部分が」としてはや注目しないうというのではなく、すべての部分がいわば縫い目のない衣服のようにひとつになつて形をなしている「ような状態を指している (Total)」。たとえば大前提、前提、そして結論が不可分の関連をもっている三段論法の論理構造などを考えてみると、それぞれの命題を構成する要素が、論理と意味とによってひとつに束ねられているという事実も明白であろう。

このような状態を指して、ソローキンは「論理—意味的統一」と表現したのである。いうまでもなく、これこそソローキンが本質的要素とよんでいるものにはかならない。

ソローキンの議論はすべて、この最深層に位置する「論理—意味的統一」を基礎として展開されている。たとえば、社会変動を論じるさいには、「論理—意味的統一」の変化がまず始めに起き、その後、徐々に表層の変動へと波及していくと特徴づけてりしている。彼がこうした変動を「内的変動の原理」という名称で定式化していることからしても、社会文化現象における、内的で根源的な「論理—意味的統一」をどれだけ重視しているかがうかがえるであろう。

このように、ソローキンは社会文化現象ないし存在全体を層構造として捉えていると考えられる。とはいえ彼は、自分の直感を頼りにこの文化の存在構造を把握したわけではない。これと表裏

一体をなす認識方法、すなわち社会科学における方法論は、『動学』第一章の後半部分と、これに続く第二章との主題となっている。以下では、これについて、詳論する。

### 第三章 統合主義社会学とその対象

#### 第一節 因果—機能的な方法と論理—意味的方法

前節で論じたように、ソローキンは「論理—意味的統一」を、彼自身の認識の拠り所として社会現象を考察しようとしている。彼が依拠する方法は「論理—意味的」方法と称され、『動学』全四巻において一貫して用いられている。

ソローキンの判断では、彼の時代までの社会文化研究の方法の中でも特に有効なのが、この論理—意味的方法と自然科学に範をとって進歩してきた因果—機能的統合方法である (Vol. I: 22)。もっと一般的にいえば論理—意味的方法と因果—機能的方法は、それぞれ演繹法と帰納法に該当するであろう。現象の観察によって発見された因果関係によって、要素間の機能的関係までも説明してしまおうとする因果—機能的方法は帰納法とよべるものであるし、同様に社会文化現象の意味や同一性 (identity) を拠り所とし、またその現象の発生の仕方をとらえる論理—意味的方法は、演繹法とみなしてもさしつかえないであろう。ここでいささか迂遠ではあるが、確認のために因果—機能的統合方法の要点だけをかいつまんでおきたい。

もとより社会科学の重要な任務は、複雑な社会文化現象に特定の斉一性を見つけたすことにある。この斉一性は、現象Aが現象Bの後、あるいは同時に起きた場合に見出される。その結果として因果・機能的統合方法は、現象の前後関係や共時性などといったものが、「意味、または論理的な合一性 (coalescence) の属性となる斉一性である」ということを発見するのである (Vol. I: 23)。この意味や論理の発見の意義を、ソローキンは次のように説明している。それによると、「関係の斉一性が因果関係によって統一した共通点であるとするなら、それらは論理―意味的統一体からすると、中心となる意味や観念の同一性である」(ibid.)。これは、社会現象における窮極の統合である「論理―意味的統一体」の探求には、社会科学の依拠する「因果―機能的統合方法」をもってしても、到達可能であることを意味している。

ただし、「因果―機能的」方法を共有する、自然科学と社会科学との間には、両者を隔てる決定的な違いがある。もともと自然科学の分野で開花した因果の方法は、複雑な現象を一般化し、複合体から単体へと夾雑物を取り払っていき、極度の単純化をはかる。言い換えると、有機的なシステムから、無機的なシステムへと単純化を進めていく。したがって無機的な物質システムは、組織としては複雑であっても、すべてが普遍的統一体によって構成されている。端的にいえば、自然科学における現象の斉一性は、いっそう複雑な現象の典型となりえる (ibid.)。

ソローキンは、こうした自然科学の方法を、不用意に社会文化現象の解明に応用することを峻拒している。こと文化に關していえば、無機物を研究するような「単純な社会的原子あるいは社会的統一体というものは発見されていないし、できもしない」というがその理由である (Vol. I: 24)<sup>(6)</sup>。そこで現象全体の共通点である「中心的な意味、観念、精神の性向 (bias) という同一性 (あるいは類似性)」(ibid.) を探求する論理―意味的方法に、もっぱら期待がかけられたのである。あえて対比させていうなら、論理―意味的システムにおける意味、観念、精神の性向、原理、あるいは規範が、物質システムにおける原子、陽子などの統一体に相当するものであろう (Vol. I: 24-25)。それではいまいちど、彼が本質的要素と見なしている論理―意味的統一体を定義し直しておきたい。

## 第二節 因果的結合と論理―意味的統一体

ある社会現象のある部分に焦点を絞り、いわば線引きを行って、分節化を押し進めていくのは、科学や理性性のとった普通の認識の作法である。しかし、その分節化によってもたらされる断片的な知識は、たとえ再びこれを再構成したとしても、生気のない表面的な虚像、すなわちソローキンのいう集積に過ぎないのではないだろうか。ソローキンの認識対象は、あくまでもこうした分節化に先んじて、すでにして直観されている完全無欠の (int-

brai) 存在、つまり「論理—意味的統一」にはかならないのである。本稿の冒頭で述べた認識に先行する「なにものか」というのがこれにあたる。

それでは自然科学的、実証主義的な社会学が探し求めてきた因果的結合と、ソロキンが研究対象の中心に位置づけた論理—意味的統一との間には、どういった差異が見られるのだろうか。

顕著な相違は、因果的統一が推論に基づき、論理—意味的統合は直観、知覚、感覚など、人間のあらゆる能力を総動員して獲得されるということである。たとえば因果的方法は、いくつの変数がどのように変化したかによって法則性を見つけたらそれとすることで、それがなぜ変わったのかを問うことはしないし、かつまたできない。この方法は、ただ「そうなりやすく、今後ともそうであり続けるであろう」(Vol.1: 26) ということのみを知りうるのである。ここに因果的統一の限界がある。それは、医者と犯罪者が行った刃物で身体を切開するという行為を、捉えようとしたときに露呈されてしまう。この事態を因果—機能的に説明すれば、行為者 A (医者あるいは犯罪者) が、刃物を用いて被行為者 B (患者ないし被害者) の身体を切開した行為であるとしか説明できない。これでは両者の異同をはっきりと見出すことは、どうてい不可能である。この行為の真相を説明するにはどうしても、行為の「理由」を究明しようとする論理—意味的統一が必要となってくるのである。

以上のことからすると、論理—意味的統一とは因果—機能的統一よりも、現実に近い像をわれわれに投げかけてくるように思われる。さらに、すでに指摘しておいたように、因果—機能的法は変数 A が変数 B の後もしくはその逆、あるいは同時に起きなければ斉一性を発見できなかった。これに対し意味—論理的方法は、ことなる時代と場所で発生した現象にさえも、論理的ないし意味的関連を見つけ出すことが可能である (Vol.1: 26-27)。

また因果—機能的関係は、無機的、有機的、そして超有機的世界のいずれにも存在するが、反対に「論理—意味的統一」は人間の思想と想像力をふくむ現象の分野、すなわち超有機体にしかな存在しないということになる (Vol.1: 28)。よって社会文化現象の本質を規定している「論理—意味的統一」を研究するには、超有機的世界の深みへと足を踏み込まなければならないのである。ところが因果的方法は、いたずらに無機的、有機的な世界を彷徨し、論理—意味的統一にまで到達できないことも十分にありえるのである。つまり先ほどの例でいえば、「刃物」による「切開」という行為の意味を理解するのに、刃物の性質という無機的世界あるいは人体の性質という有機的世界の分析へと向かってしまつて、肝心の「切開」行為の行為者と被行為者とが、互いにどのような関係にあるのかという超有機的世界に目を配ることを怠ってしまう恐れがあるのである。

おまけにもうひとつの違いも付け加えておこう。いわゆる無機

的、有機的な世界の「現象をしないで複雑なものから、より単純なものへと省いていけば、関係を表す因果的定式の適用範囲は広がっていく」のに対し、超有機的世界に属する社会文化現象に限っては、「因果的統一体を持つ『原子』には分解できない」ので、「巨大な複合体の個別の要素をまるごとふくむ包括的な意味を模索」する必要があるとしてもでてくるのである (Vol. 28-30)。この「包括的な意味」が、すでに何度か言及している本質的要素ないし論理—意味的統一体であるのはいうまでもない。

要するに「論理—意味的關係の研究における適当な方法とは、たんなる具体的記述でも因果的定式でもなく、それらの論理的な意義、または論理的な共有 (coherence) からみた全体の断片の適切な統一である」(Vol. 32)と確言できよう。別の言いかたをすれば、論理—意味的認識の窮極の目的とは、「非統合的断片のカオスの宇宙をかたどりながらも、すべての構成要素に充満している核となる原理(理由)の発見」にはかならないのである (Ibid., 原文はイタリック)。はたしてその原理とはいかなるものであるだろうか。

### 第三節 社会文化現象の第一原理

まずはじめにソローキンは、社会文化現象の本質である論理—意味的統一体の「核となる原理」<sup>(8)</sup>を表一のようにまとめている。

(Vol. 33)

表一について一言すれば、「第一の文化」は実在が超感覚的ないし観念的な原理から論理的に導きだされるのに対し、「第二の文化」のほうは物質的あるいは感覚的な原理をもとに引き出される (Vol. 34)。ソローキンの統合主義によると人間の認識作用には、少なくとも直観、観察、そして理性の三つがある。そのうち「第一の文化」は主として直観が働くことで、また「第二の文化」は主に観察を働かせることで認識に至る。

ひとまずこの原理を承認するとすれば次の結果をえることができる。まずは文化の重要な側面、構成要素の性質と働き、あるいは支配的な意識の残像 (residue) などを明確化することができる。さらに文化の包括的理解を進めつつ、一方では文化か論理的に統合しているかどうかの判定を下すことができる (Vol. 34-35)。しかも、たとえこれらの結論がえられない場合にもそれなりの重要な結論をえることができるのだという。それは文化が統合していないことや、文化の全体ないしは一部が論理を超えているか非論理的であるといった結論である (Vol. 35)。

しかしこの原理が本当に正しいのかどうかは、『動学』全巻において証明される命題であって、ここで即答されているわけではない。そのかわりにソローキンは、原理が正しい場合と、そうでない場合とをそれぞれ仮定して付随的結論をまとめている。

まず第一に、文化の構成要素の部分が、表一にあるような、統一化原理 (unifying principle) によって統合されていることが

表一 第一原理

第一の文化	第一の文化
理性主義、神秘主義の支配	経験主義の支配
理想主義の支配	唯物主義の支配
永遠主義の支配	時間主義の支配
非決定主義の支配	決定主義の支配
實在論の支配	名目論の支配
社会学的普通主義の支配	社会学的個別主義の支配
最初の実在としての自治体ないし法律的パーソナリティの概念の支配	便宜主義的擬制としての自治体ないし法律的パーソナリティの概念の支配
絶対的原理の倫理の支配	幸福(快樂主義、功利主義、幸福主義)の倫理の支配
自然科学における僅かの発見と発明の支配	多くの発見と発明の支配の支配
ゆるやかな変動率を持つ社会生活の静的特性の支配	急速な変動率を持つ社会生活の動的特性の支配
観念的絵画様式の支配	視覚的絵画様式の支配
文学の主形態としての「聖書」の支配	官能主義と性主義の文学の非宗教性におおわれた實在論と自然主義の支配
純粹、または弱まった神權政治の支配	純粹、または弱まった非宗教的權力の支配
罰則と刑法の基本原理としての「贖罪」の支配	「調整」、すなわち「不適応の」人物と「社会的に危険な」人物とを一緒くたにした再教育の支配

(Vol. 33)

判明した場合を考えてみよう。そのさい浮かんでくるのは、原理の発見方法と、その論理的統合の原理の妥当性が、いかにして検証できるのかという疑問である (Ibid.)。これに対するソローキンの解答は以下のとおりである。まず原理の発見の方法については、いかなる原理であっても観察、統計的研究、論理的分析、あるいは直観、夢想などからも発見されること。またその原理の確証については、妥当性の規準が論理的であることと、しかも事実に向まく適合し、いくたびもの検証に耐えなければならぬことなどが指摘されている (Vol. 36)。これらがソローキンによって与えられた回答である。ただし「原理の確証」にさいしては、少なくとも最善と思われる理論を採用することが大前提であるし、何度も精査を積み重ねることにより良い理論が選定され、そうすることで理論の信憑性もしだいに増していくことはいくらでもない。

残る第二の問題を次に考えてみたい。文化の構成要素と統一化原理とが、全く別物であることが判明した場合には、以下のふたつの選択肢のいずれかを選ばなければならない。つまり、文化が論理的に結合していないと認定するか、それともっとふさわしい原理を探すかという二者択一である。現実問題としては、事実 に即した原理を模索するという第二の道が穩当であろう。たぐさんの理論の中から「僅かの事実しか相応しないものを次々と排除し」ていくという姿勢をとり、「いくつかのせめぎ合う理論の

中では、問題となる現象の領域を最も正確に描き、そうとうの数にのぼる現象の記述を盛り込んでいる理論が最も良い」という(Tol: 37)。このようにソローキンはあくまでも妥当性の高い原理を追求しつづけるという後者の立場を固守している。

#### 第四章 文化の存在構造と認識方法の接点

すでにみたように、ソローキンは『動学』第一巻第一章において、文化研究の基礎固めを行った。窮極のところ、そこでの課題は、文化が全体として統合されているかどうかの検証であった。哲学の分野からすれば、イデアやその他の根源的絶対者をもって存在のすべてを論理的に説明する(存在構造論)ことにして、それとは正反対の感覚的に知覚できる事物のほうから絶対者へと向かうような手段(認識方法)はとらないであろう。極端な場合には感覚的事物など、皮相で卑俗な存在ないし幻想にすぎないといつて、言下に斥けることさえできよう。ひるがえって社会科学はといえば、それこそこの極めて皮相なところから研究を始めなければならぬ、という性質を持っている。すなわち社会科学は感覚的に認識しえた事物をもっぱら考察の起点とするほかないのである。

しかし、これにはなにも社会科学が存在の根源というものを、研究の対象としてはならないことを意味しているわけではない。それどころか、存在の根源である本質的要素に窮極的な目的を設定

することは、社会科学をふくむすべての学問に共通する課題のほずである。社会文化現象(存在)を統一化原理(根源)から解釈し直そうとするソローキンの意図は、こうしたごくあたりまえの、しかも今では忘れ去られつつある学問の姿勢を取り戻すことにあった。この根源的存在にこそ社会科学の確固たる足場は築かれるべきである、というのがソローキンの信念であった。

めまぐるしく移りかわる現象に目を奪われ、肝心の根源的な本質的要素に根ざす存在を看過してしまわないために、ソローキンは社会文化現象を構成している諸層(空間的、外的、機能的、そして論理的)を明確にしておき、それぞれの性質の違いに注意を促したのであった。

それではこの方法によって引き出しうる命題を暫定的に挙げておきたい。

命題一 文化には、たんなる空間的集積から論理的に統合したもまでの諸相がある(Tol: 48)。

命題二 空間的隣接や外的統一は文化複合体ではあるが、決して機能的、論理的な形式ではない(Tol: 48)。したがって、空間的隣接や外的統一からえた情報を、すべての文化に一般化することはできない。また、上のふたつの命題が真ならば以下のことは誤りである。(一)すべての文化は統合した統一体であること、(二)個々の文化的要素の変動は他の要素や全体に影響を及ぼす

117 (Ibid.)。

命題三 空間的集積と、機能的あるいは論理的な統合システム  
 とでは、変動の性質を異にする (Vol. I: 49)。すなわち統一した  
 文化システムの変動は必ずや全体もしくは大部分の変動を引き起  
 こすのに、空間的集積の変動のほうは、偶然の外部要因に左右さ  
 れる。しかも統一したシステムは「主にシステム自体の範囲内の  
 力」を変動の原動力とする。またそのさい純粹な文化統一 (論  
 理的、機能的なシステム) に対しては、集積とはことなり内的論  
 理の考察を行うのが極めて有効である (Vol. I: 50)。

### むすび

ソローキンの構造的ないし静学的社会文化システム論は以上の  
 ようにまとめることができる。ただし、これとは別に動学的側面  
 をも視野に入れなくてはこのシステム論を全体的に論じたことには  
 ならない。冒頭で指摘したようにソローキンの変動論は、彼以  
 前の主要な歴史循環論を発展、継承しようとする意図によって書  
 かれているからである。これについては課題として残しつつも、  
 しかし次のことを結論としてむすびにかえたい。

ソローキンは、人類の文化を第一の文化と第二の文化に二分し  
 た。その類別は人間の意識構造から導かれる当然の帰結である。  
 すなわち身体感覚でものごとをとらえるものと、理性や観念の力  
 をもって、それらをとらえようとするものである。これは、精神

と肉体を通じた事物の把握であると言い換えてもいいのだが、人  
 間の認識は、歴史を通じて、この精神中心の認識と肉体中心の認  
 識の間を行き来している。こうした認識の振幅と、その認識対象  
 である変化する客体との相互関係が明示されなくては、世界の全  
 貌を把握することは不可能であろう。本稿は、そうした認識の振  
 幅を歴史の循環として位置づけようとしたソローキンの社会文化  
 システム論の一側面を論じたものである。これと表裏一体をなす  
 変動論の局面が明らかにされたとき、統合主義の社会学はひとま  
 ずの完成をみるであろう。

(1) 意識の構造論の観点は、晩年の利他主義研究において、  
 全面的に展開された。そこでは、本稿で論じる四つの類別  
 が、「生物的無意識 (潜在意識)」、「生物意識」、「社会文化  
 的意識」、「超意識」という語句で表現されている (S.  
 pokin 1954)。

(2) これは、一九三〇年代における哲学界をはじめとする、  
 あらゆる学問分野での現象学運動と関わりがあるのではな  
 いだろうか。ソローキンは遅くとも一九二八年には現象学  
 に関心をもっている。彼はこの時点でロシア語訳ではあれ  
 フッサール (Edmund Husserl, 1859-1938) の『論理学研  
 究』に目を通しており (1928, 739)、一九三七年にもなれ  
 ば英訳『イーデン』をもそうとう読み込んだ形跡があり、

さらに社会学的—現象学的読解との名称でもって、社会現象における主観的要素を客観的に読解する方法を切り開こうとしている(1987: 58)。

(3) 本稿では取り扱うことはできないが、『動学』第三章では、存在の根源ないし本質的要素の具体例が明示されている。これによって、抽象的な議論に実例による華やかな色彩が添えられている。さらに方法論である第一部を締めくくるのは、社会文化の変動論である。第二章での議論が静的であったのに対し、ここでは動学が主題となっている。

(4) この結合については、『現代社会学理論』における「地理学派」の章で考察されている(1928: 99-103)。

(5) 「内在的変動」の原理(Vol.4: 600-618)がソローキン特有の重要な概念であることについては(Toynebee 1963: Perrin 1996)を参照。

(6) すでにソローキンは『現代社会学理論』の一節で「機械論的社会学」と「社会現象の生物学的解釈」を論じており、物理的法則のみで人間の多様な行動を計ることの無意味さを窘め(1928: 29)、また生物学の資料を用いて自説を正当化しようとする欺瞞を暴いている(1928: 218)。

(7) ただしソローキンは因果—機能的な方法か論理—意味的方法のいずれかを二者択一する立場を取らない。「文化統合の高い程度を想定するときなら、必ず最高水準で全ての

文化に適応でき、したがって因果的方法を補うに違いない論理—意味的方法」を採用し、この2つの方法を併用してこそ「真の統一を含む構成要素の性質を把握できるシステム」に整理することができる彼は考えた(Vol. 1: 47)。なお、これと同種の問題が、すでにロシア時代の著作でも検討されている(吉野浩司 二〇〇二)。

(8) なお『動学』第二巻では、この原理が多くの紙幅を割いて検証されている(Vol.2: 181-384)。

(9) ソローキンの考察はこれにとどまるものではない。論理的、機能的なシステムすなわち現実のシステムには、以下に挙げるように、これまで無視されてきたいくつかの重要な側面がふくまれているのである。一に、統一(機能的、論理的システム)の機能と変動には、自立的で固有の自動制御(self-regulating)が備わっていること。第二に、統一体はシステムの自立性を脅かすような要因を切除する手段を持っていること。第三に、この自立性は外的状況にも内的状況にも規定されていること。第四に、内的要因を無視してしまうと、文化的、社会的なシステムの変動の傾向、再起、順番、振動、周期的変動、そして速度に関する理解を妨げてしまうこと。第五に、ある特定の関係をもって、現象の唯一の要因であると考えるのは誤りであること。第六に、システムには、いわば伝染病のような、変

更や破壊を余儀なくせられる原因も存在しはせぬが、それにしたがひで、あくまでそのシラトの画報から全体へと進行して来たものがある( Vol.1: 50-52)。

参考文献

引用並に参照に際しては、本文中の半角丸括弧内に(著者出版年: ページ数)の順序で記した。但し(Sorokin 1937-41)のごとき(巻数: ページ数)を記せざしむ。

Ford, Joseph B., 1963, *Sorokin as Philosopher*, Allen, P. J. ed., *Pitirim A. Sorokin in Renewal*, Durham N.C.: Duke University Press, pp.39-66.

----, 1996, *Sorokin's Methodology: Integralism as the Key*, Ford et al., 1996, *Sorokin & Civilization, A Centennial Assessment*, New Brunswick: Transaction Publishers & London.

Ford, Joseph eds., 1996, *Sorokin & Civilization: A Centennial Assessment*, New Brunswick: Transaction Publishers & London.

Johnston, Barry V., 1990, *Integralism and the Reconstruction of Society: The Idea of Ultimate Reality and Merging in The Work of Pitirim A. Sorokin*, *Ultimate Real-*

*ity and Meaning*, Vol.13, No.2, pp.96-108.

----, 1995, *Pitirim A. Sorokin: An Intellectual Biography*, Kansas: University Press of Kansas.

Merton, Robert K., 1949, *Social Theory and Social Structure: Toward the Codification of Theory and Research*, Free Press of Glencoe, 『社会理論と社会構造』 森東邦 [英名] 語、ちくま書房、一九七一年。

Merton R. K. and B. Barber, 1963, *Sorokin's Formulations in the Sociology of Science*, in Merton, *On the Shoulders of Giants: A Shandean Postscript, with a foreword by Catherine Drinker Bowen*. New York: Free Press, ss.

Perrin, Robert G., 1996, *Sorokin's Concept of Immanent Change*, Ford, et al., 1996, *Sorokin & Civilization: A Centennial Assessment*, New Brunswick: Transaction Publishers & London, pp.105-123.

Sorokin, Pitirim A., 1927, *A Survey of the Cyclical Conceptions of Social and Historical Process*, *Social Forces*, Vol. 6, Sept.

----, 1928, *Contemporary Sociological Theories*, New York: London: Harper & Brothers.

----, 1936a, *Forms and Problems of Culture: Integration*

- and Methods of Their Study, *Rural Sociology*. Vol.1, No.2, pp.121-41. [Published as *Social and Cultural Dynamics*, Vol.1, chap.1, pp.1-53].
- , 1936b, Forms and Problems of Culture: Integration and Methods of Their Study, Part II, *Rural Sociology*, Vol.1, No.3, pp.344-74. [Published as *Social and Cultural Dynamics*, Vol.1, chap.2, pp.55-101].
- , 1937-41 [1962], *Social and Cultural Dynamics*, 4 vols. The Bedminster press, (Vol. 1, Fluctuation of Forms of Art. 745p, v. 2, Fluctuation of Systems of Truth, Ethics, and Law. 727p, v. 3, Fluctuation of Social Relationship, War, and Revolution. 636p, v. 4, Basic Problems, Principles and Methods. 804p.), [1962, New York : The Bedminster Press].
- , 1954, *The Ways and Power of Love: Types, Factors, and Techniques of Moral Transformation* (Boston: Beacon Press). 『若く愛成熟した愛—比較文化的研究』(細川幹夫 [ほか] 訳、広池学園出版部、一九八五年。
- Toynbee, Arnold J., 1963, *Sorokin's Philosophy or History*, Allen, 1963, *Pitrim A. Sorokin in Review*, Durham N.C.: Duke University Press, pp.67-94.
- 吉野浩司、二〇〇一、「一九三〇年代アメリカの文化研究の根底にあるもの—P・A・ソローキン『社会的・文化的動学』を中心—『統合主義社会学』—」、『一橋論叢』第二二六巻第一号。
- , 二〇〇一、「II・A・ソローキンの相互作用論—『社会学体系』第四章を中心—」、『一橋研究』第二三四号。

二〇〇一年十一月二四日受稿  
二〇〇二年四月二二日レフェリーの審査  
を経て掲載決定

(一橋大学大学院博士課程)